



鶴岡市／月山の紅葉

大地が放つ 錦秋のパッチワーク

 荘内銀行

Cradle

秋号

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

令和8年10月1日発行
2026 Autumn vol.92

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15「株式会社 出羽庄内地域デザイン」 電話0234(64)0888
制作／Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コア・コミュニケーション」 電話0234(41)0012

知らなかった世界への入り口

Cradle

秋号

vol.92
2026 Autumn

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

特集

奥深き世界へ



ご自由に
お持ちください
TAKE FREE

左内への手紙
[10通目]

お金もちの国

俳優

片桐 はいり



黄金色の田んぼと鳥海山

はじめまして、は海からだった。

たしか新潟から海沿いに上がってきて、日本海に沈む夕日をながめながら温泉なんか入って、お部屋にもどったら大きなダンボール。明日ゆく酒田の公演の主催者様から、庄内の幸のお届けものでございます！

30年ほど前、なりたて30代のわたしはなまいきにもひとり芝居で旅をしていた。9人のスタッフとともに、ワゴン車で日本全国津々浦々。あちこちでその土地の幸をいただいたけど、この時お風呂あがりにかぶりついた刈屋の梨のびっくりするよな甘さと水気と、不思議な色をしたとびきり味の濃い枝豆、のちにだだちゃ豆と判明、は、このツアーいちばんのごちそうとなった。

次のときは川からだった。

詩の朗読の会に誘われて、送られてきたチケットはなぜか新庄まで。そこから先は舟でおこしください。

はじめましての詩人の平田俊子さんとふたり、最上川を舟で下って酒田に向かった。五月雨を集めた大河、新緑にまじる藤の紫めでながら幽谷を舟でゆく。

お迎えの車にのりかえて、目の前にひらけた景色にのけぞった。いち

めんの水田。空をうつしておなじだけ明るい水面のかがやき、開・放・感！

そのまた次は黄金色だった。

二度目の詩の会は秋だったから、銀色の水田は見えるかぎり黄金色に染まっていて、金色の田んぼをしたがえた鳥海山が、ご満悦！みたいな顔して長い両うでひろげていた。ほれぼれした。なんと豊かで恵まれた景色か！思わず叫んだ。

「ここはお金もちの国だ！」

ひとり芝居、そして詩の会でわたしをこのお金もちの国にいざなってくれたのは、公立のホールでも、企業でも、地元の資産家でもなんでもなくて、酒田詩の朗読会を主宰している阿蘇孝子さん。

どういうやりくりかはわからないが、おひとりの志しと資金だけで、たびたびこうしてわたしたちを招いてくださる。そして、毎回毎回手のこんだ手口で、お金ではけして買えない庄内のすてきを味わわせていただいている。

じっさいの庄内地方の経済のことは知りません。でもわたしにとって、ここは誰が何といおうと、お金もちの国。

さあ、次はどこから行きましょう？

かたぎり・はいり | 俳優

1963年、東京都出身。大学在学中に映画館のもぎりのアルバイトと同時に俳優活動を開始。1986年『コミック雑誌なんかいない!』で映画デビュー。1994年から『片桐はいりー人芝居 ベンチャーズの夜』(作・演出:岩松了)で全国を公演。映画『かもめ食堂』やNHK朝の連続テレビ小説『あまちゃん』等への出演のほか、現在も映画館のもぎりとして活動。酒田市の旧港座、鶴岡市のまちなかキネマにもチケットをもぎりに訪れている。著書に『わたしのマトカ』『グアテマラの弟』『もぎりよ今夜も有難う』(いずれも幻冬舎文庫)がある。

庄内には、まだまだ知らない深くて濃ゆい世界があつて
ひとつのことをとことん追いかけてみると
知れば知るほど面白くなって、もっと知りたくなる。
そんな好奇心をくすぐる場所が、庄内のあちこちにあります。
庄内とどんな関係があるの？と思えるようなことにこそ
知らなかった歴史が隠れていて、点と点がつながる発見も。
今回は、そんな4つのミュージアムを訪ねて
それぞれの世界をよく知る皆さんにお話を聞きました。
ちよつとマニアックだからこそ、面白い。
偏愛こそ、世界を深くする。
心の赴くまま、庄内の奥へ。

特集 奥深き世界へ



日本を 外国から守るため 一途に回天を 目指した男

「維新回天の魁」と称される清河八郎は、
庄内町清川の出身。郷土の清河八郎記念館では、
2013年から廣田幸記館長がその功績や
人間性を来館者に伝え続けています。



廣田 幸記さん

2004年放映のNHK大河ドラマ『新選組!』の影響で清川に
観光客が急増したことを機に、清河八郎記念館役員に就任。
2013年からは館長を務める。2020年、クラウドファンディング
で清河八郎の旅日記『西遊草』復刻版刊行(岩波文庫)。



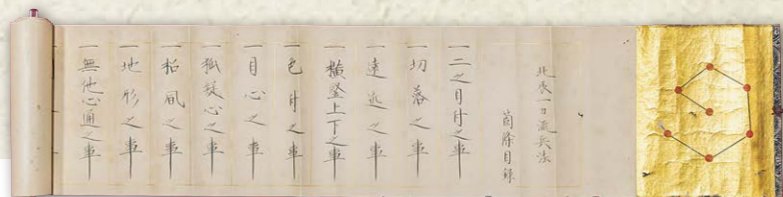
清河八郎記念館

開館／10:00～17:00
休館／月曜、12～2月
tel・fax 0234-57-2104
山形県東田川郡庄内町
清川上川原37

八郎が持ち歩いていた軍旗。
「赤心報國回天倡始」回天
の大事業を先駆けて始めるこ
とで国に尽くす、という意味。

赤心報國回天倡始清正朋

22歳で北辰一刀流玄武館に入門し、約1年で初目録を得た。その後、中目録の兵法免許も取得。



「回天」とは天下の形勢を一転させること。江戸末期の動乱期では、徳川幕藩体制を覆して世直しをするという意味に使われました。「回天の魁」と称される清河八郎の目的が、「倒幕」といわれてきた所以です。廣田さんは話します。「2年前、当館の保管資料の中から八郎の父宛ての手紙が発見されて、目的が倒幕ではなかったことが判明しました。八郎は、日本が外国から植民地化されないために、朝廷と幕府、

薩摩藩、志を同じくする人々(草莽の志士)を一つにしたオールジャパンの体制を築くことで、外国と対等に渡り合うことを目指していたのです。自らが為すべきことを、人とのつながりを作りながら実現に向けて進んでいく。八郎のその姿は、幕府直轄の最高学府、昌平坂学問所で学ぶため、置き手紙をして上京した時から始まっていたと廣田さんは話します。抜きん出た才覚と人脈でその目的を果たした後

は、日本の置かれた状況を知るために、諸国遊学の旅へ。各地を巡るうちに植民地化を狙う外国の脅威と幕府の現状に強い危機感を抱き、日本を守るには天皇を中心に一丸となって立ち向かう道しかないと確信します。1860年、江戸で尊王攘夷を目指す「虎尾の会」を結成、幕臣の山岡鉄太郎(のちの鉄舟)らが参加します。その後、幕府の罠にはまって追われる身となると、逃亡生活をしながら開西

や九州で尊王攘夷論を説いて仲間づくりを展開。寺田屋事件が起こって京都挙兵計画を断念するも、江戸に戻り、新たな策「急務三策」を幕府に建言します。増え続ける浪士を集めて警護隊を組織するという提案を受けた幕府は、將軍上洛の護衛という名目で浪士組の結成を許可しました。「でも八郎の本当の目的は、浪士組を幕府ではなく朝廷の隊にして攘夷を行うことでした。そして八郎は、浪士組が天皇から勅命

を受けるという前代未聞のことを成し遂げ、江戸に戻って横浜焼き討ちを計画しますが、決行を目前に幕府の刺客によって暗殺されました。以来、幕府と浪士組を欺いた狡猾なペテン師という人物像を持たれるようになります。でも、自分の意思をつらぬいた生涯だったと思います。2018年、庄内町で「清河八郎大河ドラマ誘致協議会」が設立されました。2020年、廣田さんも八郎の人

間性を伝えたいと、八郎が母親を伴い伊勢参りの旅をした時の日記『西遊草』の復刻版を刊行するプロジェクトを、クラウドファンディングで実行しました。この本からは当時の風景や風俗だけでなく、八郎の母親思いの姿や旅先で出会う人たちに対する温かな人柄も伝わってきます。郷土の志士を郷土の人たちが再評価し、伝えていく。この地には時を超えた絆の物語が存在しているようです。

「狡猾・ペテン師」というイメージとは異なる八郎の姿を伝えたい。



写真提供＝清河八郎記念館

1830年、清川村(庄内町)の大豪農・齊藤家に誕生。18歳の時に江戸へ赴き、その後、全国を游学。北辰一刀流玄武館、東条塾、安積長斎塾、昌平坂学問所に入塾。25歳で江戸に清河塾を開き、1860年の桜田門外の変を機に尊王攘夷の活動を始める。浪士組を集めて攘夷を目論むも、1863年34歳の時、幕府の刺客により暗殺。浪士組はのちに、新選組と新徴組になる。



復刻版『西遊草』(岩波文庫)

Information

2018年に設立された庄内町「清河八郎大河ドラマ誘致協議会」では、八郎を紹介する動画を公開中。



知的な好奇心をかき立てる不思議だらけの生き物たち

今年4月のリニューアルで展示数が約80種から約100種に増加し、さらにクラゲワールドがパワーアップした「かもすい」。支えているのは、クラゲ愛に満ちあふれたスタッフたちです。



不思議さ
トップクラス

カツオノエボシ(管クラゲ目)

たくさんのクラゲが合体してひとつの形になっているクラゲ。長期の飼育展示は難しいため、出会えたらラッキーNo.1。



2025年に
世界初展示!

インテグラルクラゲ(軟クラゲ目)

今年のリニューアルのメインとして世界初展示。名称は傘の中に数学記号のインテグラルの形が現れることに由来するが、かもすいで飼育するとなぜかその形が出てこないとか。



稚クラゲ

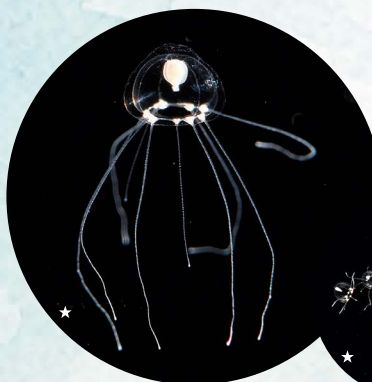


昭和天皇が
名付け親

稚クラゲ

ハマコツブクラゲ(花クラゲ目)

傘径0.5ミリの小さな小さなクラゲ。玉田さんが日本海側で初めて採集し、その一生を世界で初解明したという記録すべき種類。



よく刺される
あれ

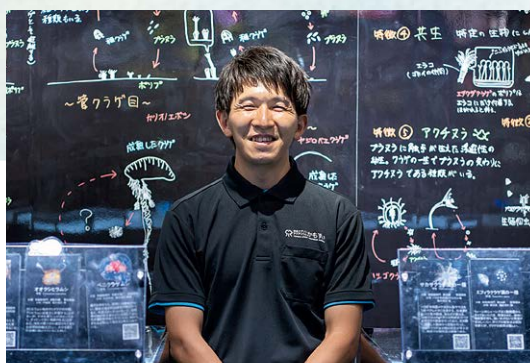
アンドンクラゲ

お盆過ぎに頻発するクラゲ被害の犯人。有名な種類だが、意外にも飼育がとて難しく、かもすいでもまだ解明できていない。展示に出会えたらラッキーなクラゲNo.2。

稚クラゲ

玉田 亮太さん

茨城県出身。北里大学大学院海洋生命科学研究科でクラゲなどの無脊椎動物を研究。2013年、長崎の水族館に入社。2022年に加茂水族館に転職。以来、クラゲ部門でクラゲの採集と研究調査、飼育研究、展示作業を行っている。



クラゲの一生や特性を解明する自分たちの基礎研究をベースに、大学や民間の研究機関が応用研究を展開していく。そうして「癒やし」や「邪魔者」というイメージしかないクラゲに新たな社会的価値を付けていけたらと話します。「私たちは命ある生き物を連れてきて、悪く言えば水族館に収容しているようなものです。だからこそ連れてきた命をきちんとつないで、海や自然のことを伝えていかなければと思いますね」。

同時に玉田さんはクラゲ研究の社会貢献も目指しています。

「解明できていないことがわかるのも、論文として発表できるのも楽しいです。また、お客さんにクラゲの謎を展示で伝えて興味を持ってもらえると嬉しいし、やりがいを感じます。これからも、かもすいに来ないと見られないクラゲをたくさん展示して、来るたびに何かしらの発見があると思ってもらえる水族館にしていきたいです」。

の種類の種類や水温などを試行錯誤しながら一からノウハウを作ることになります。以前は2千種から3千種といわれていたクラゲ。その後次々に新種が発表され、今は4千種といわれています。しかもまだまだ未知の種類があり、かつ、それぞれの一生が解明されていないとのこと。「だからクラゲ研究は面白い」と玉田さんは話します。

その一つがクラゲの採集です。玉田さんは月に一度、近場の海から海外までさまざまな場所に赴き、各地の水族館や大学機関と連携しながら観察や採集をしています。採集したクラゲはかもすいに持ち帰ってポリプ(卵)づくり。玉田さんいわくここが最も重要な部分で、ポリプができて赤ちゃんが生まれれば、加茂式飼育システムで大人まで育てて展示ができると話します。「でもクラゲ飼育の難しさは、当館のノウハウが通用しないクラゲが結構な確率で現れるところです。そうすると餌

「ここで働くようになって知的な好奇心と研究意欲がとても満たされています」。そう話すのは、4年前に鶴岡市立加茂水族館(以下かもすい)に入社した玉田亮太さん。クラゲの種類、個体数といった展示規模、クラゲの状態の良さ、画期的な加茂式飼育システムなど、かもすいは玉田さんにとって理想的な水族館だと語ります。「仕事環境も、展示のための作業が終われば空いた時間で自分の研究ができるので、こういう水族館って他にはなかなかないと思います」。

もともとエビやカニなどの無脊椎動物が好きで、中でもダントツに謎が多いクラゲに惹かれ、学生時代から研究を続けているという玉田さん。前職の水族館でも休日など業務時間外を利用して独自に研究をしていました。2022年、かもすいから求人が出たのを機に転職。現在はクラゲ専門の学芸員として、調査研究ほか多岐にわたる仕事を担当しています。

水族館を窓口、海の世界に興味を持って楽しんでほしいです。



クラゲ研究室。他の水族館や研究機関が見学や研修に訪れると、必ずといっていいほど加茂式飼育システムを見て驚くそう。



国内外の海でクラゲを採集している玉田さん。写真は長崎でユウレイクラゲを発見したところ。

★は写真提供=加茂水族館



東北エプソンアクアリウムかもすい
(鶴岡市立加茂水族館)

開館/9:00~17:00(最終入館は16:00)
休館/年中無休
tel 0235-33-3036
山形県鶴岡市今泉大久保657-1

今回のリニューアルで増築されたマイクロアクアリウム。顕微鏡やモニターで、肉眼では気づけないクラゲの美しさや不思議が観察できる。



玉田さんのクラゲ愛がふんだんに詰まった解説ボード。館内の解説はすべて玉田さんと同じ研究員の池田周平さんの手書き。



悠々と空をゆく、猛禽類。生物の頂点から見える世界へ

鳥海山の麓にある

もうきんるい

猛禽類保護センター「鳥海イヌワシみらい館」は、

希少な野生生物の調査研究、普及啓発、

保護を目的とした施設。〳鳥の目〵を知ること、

日々の視点が変わるような体験が待っています。

本間さんが「ザ・猛禽類という感じじゃないところが面白い」と話す「ハチクマ」はタカ的一种。スズメバチなどを好む食性で、ハチの攻撃から身を守る硬い羽毛を持つ。日本には夏鳥として飛来。



開館10周年を記念して誕生したキャラクター、ワッシーくん



参加・体験型のハンズオン展示は見どころ。猛禽類の生態を遊びながら体感できる仕掛けがたくさん。



観察会は誰でも参加可。北から南へ一目散に大勢で移動するノスリなど、空の上で起きていることを身近に感じる体験。



センターでははく製、骨格標本を約100点収蔵。はく製は初代所長の関山房兵さんがはく製士さんに依頼して作成したもの。山形県では見られない種も。展示数には限りがあるため、年4回の展示の機会をお見逃しなく。



見て、触れて、ちょっとした猛禽類気分も味わえる館内。シアター内にある実物のイヌワシのようなバードカービングは“現代の名工”内山春雄さんの作。



楽しみながら環境を守ることで、人もイヌワシも幸せになれると思います。



環境省 猛禽類保護センター
鳥海イヌワシみらい館

開館／9:00～16:30(最終入館16:00)
入館料／無料
休館／年末年始、11月～3月：火曜日、1～2月：土日祝日、その他メンテナンス日
tel 0234-64-4681
山形県酒田市草津湯ノ台71-1
https://www.raptor-c.com

★は写真提供＝猛禽類保護センター



ハイタカ

本間 憲一さん

鶴岡市出身。教育普及係として、観察会などの野外イベント、自然素材を使った工作体験イベント、数年に1度の特別展示などの企画運営を担当。

猛禽類とは獲物となる生き物の数やバランスを調整し、生態系を健全に保つ存在。その生息状況は自然環境を映す指標にもなります。「猛禽類が担ってきた自然界の調整は、人間にはできません。一方で、酒田市の『市の鳥』でもあるイヌワシの生息数は、森林の手入れ不足が影響で減少していることがわかっています。森林を上手に活用することでイヌワシたちの生息も守られる。生き物だけでなく、社会とのつながりや歴史との関わりも見てほしい。つながりがないものはないと思うんです」。

ワシ・タカ・ハヤブサの仲間が現在、国内に亜種を含めて約40種類、庄内周辺では27種類が観察されています。中でも本間さんが興味を惹かれるのは、代表的ではない種たち。特殊な飛び方をするノスリ、謎多きトビ、ハチを食べるハチクマ、など。「翼を見れば飛び方が、くちばしを見れば食べているものがわかります。猛禽類の体には無駄がないんです」。その違いをじっくりと観察できるのが、館自慢のはく製。生きているかのような自然な姿で、片方の翼を広げた独特なポーズをしています。「飛んでいる姿と止まっている姿を1体で観察できるように作られたもので、全国的に見てもすばらしいといわれています」。本間さんが今年の夏に企画したはく製展示「くらえ！

ワシ・タカの必殺技」では、それぞれの獲物の捕え方をユニークな技名で紹介。「生き物の特徴を工業製品に生かした事例があるように、その生態には生活に役立つヒントがいっぱいいます。実際に猛禽類を見ることが難しくても、遠くの博物館に行かなくても、ここに来れば見るができる。その役割は大きいと思っています」。

はく製や自然環境の記録は、未来へ引き継ぐ国の財産、と話す本間さん。全国の博物館で活用してもらえよう、資料のデータベース登録も進めています。また昨年「タカの渡り全国ネットワーク」に山形県で初めて参加し、庄内を通過する猛禽類の定点観測も始めました。「ここを訪れた子どもたちが、ごみを拾うとか自然環境に目を向ける意識につながってくれたらいいなと思っています」。猛禽類の存在から、自然や人の生活文化を知るきっかけに。ここは猛禽類を知る場所であり、世界の見方を広げてくれる、そんな場所です。

心の景色まで 映し出す 光と生命を 描いた画家

図書館と美術館が一体となり、書籍や郷土資料、
絵画作品がひとつの場所に集う庄内町の文化施設。
子どもから大人まで、地域の文化やアートに出会える
この場で、画家・内藤秀因しゅういんの作品世界へ。



後藤 恵さん

酒田市在住。大学では江戸の文芸や大衆文化を専攻。2015年より現職。展示やギャラリートーク、ワークショップなどの企画運営のほか、資料の保存管理、図書館窓口などを担当。写真は図書館内にあるアートボックスの前にて。

スケッチの際に使用していた画材。平筆2本を箸のように持ち、細い線は筆先を縦に、太い線は横に寝かせて押し付けるようにして描いたという。

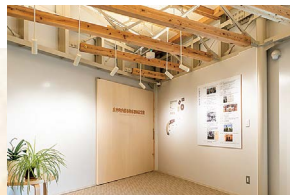


「Parc Montsouris」(1964年頃)
水彩画でありながら、油彩画のように絵の具を厚く塗る描き方が特徴の1つ。茂る青葉が、絵の具の厚みでも表現されている。

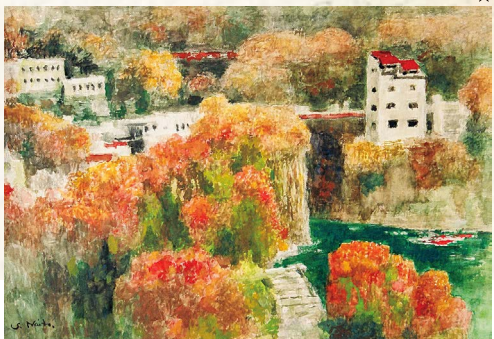
「光の表現、その場の空気感、風や湿度まで伝えるのに秀でた作家だと思えますし、そこが好きです」。庄内町出身の画家、内藤秀因しゅういん。戦後から晩年の作品を約2千点收藏する内藤秀因水彩画記念館で学芸員を務める後藤恵さんのけ けいは、内藤作品には、何気ない風景の中にも独自の着眼点があり、そこに意外性や面白さがあると話します。

内藤は1890年に寺院の次男として生まれ、画業を志して庄内を離れる

と、東京美術学校（現東京藝大）に学び、後に教員を務めながら制作を続けました。晩年まで制作意欲は衰えず、95歳で描いた作品も。もとは油彩から出発し、のちに水彩画で独自の表現を築きました。「絵具が厚く塗られているので『油彩画みたいですね』とよく言われます。目の前の対象から感じ取った存在感を大切に表現したんでしょうね」。内藤に師事した画家によれば、師は言葉少なに「強い絵を描け」と指導したそう。後藤さんが特に惹かれる作品の一つに、早春に咲く梅の花や桜を描いた作品があり、光を放つように咲く花やうねる幹は生命力にあふれ、成長していくパワーやエネルギーがみなぎっていると話します。「春が来る喜びを知っている、東北出



記念館は庄内町立図書館と併設し、いずれも令和6年に改修が完了。記念館には2つの展示室が新設された。後藤さんと館長の佐藤晃子さん。



「錦秋」(1985年)
95歳の時の大作。晩年まであちこちへスケッチに出かけ、1日に何枚も描いたそう。水彩は絵の具の乾きが早く、精力的に書き続けた内藤にとって相性の良い画材だった。

身の画家だなと感じます」。さらに面白いのは、作品を見て「この風景、見たことがある」と言う人が多いこと。「でも実際には行ったことのない場所だったりするんです。絵をきっかけに、見る人の心の中にしまわれていた風景が引き出されたり、自分の記憶とリンクする。一つの作品を前にさまざまな見え方や捉え方があって、私だけでは気づけなかったことが多くあります」。後藤さんは大学時代の先輩が言った「どんな意見にも一理ある」という言葉を、今も常に意識していると話します。

晩年まで制作を続けた内藤は、さまざまな作品を遺しましたが、その制作の経緯や作風の変遷を伝える資料は多くありません。後藤さんは「まだまだわからないことが多いので、どんなことでも知っている方がいたらぜひ教えていただきたいです」と、内藤の画業の全貌を調べて、知り得た情報を後世に伝えていきたいと話します。「美術作品や書物はタイムカプセルのようなもの。先人がどんな視点でものを見て、何を考えていたのかを私たちが受け取ってどう感じるか。そこから何かを考えるきっかけになればと思います」。地域に住む一人一人が地域を作り、ちよつとずつ地域の形を変えている、と言う後藤さん。内藤秀因もまた、この地を形作った一人。作品に込めたまなざしを受け取り、今、庄内に生きる私たちが自分自身と向き合う。それはこの館で得られる豊かなアート体験です。

「春雨庵 松の緑」(1982年)
上山に配流された沢庵禅師が住んだ春雨庵。「松を中心に据えた独自の視点と、意外なほどに鮮やかな緑は写実的でありながら概念的でもあるように感じます。美化や嘘がないのが作風の特徴」と後藤さん。



1890年、現在の庄内町古閑生まれ。山形県師範学校を卒業後、教員をしながら画家を志し上京。石井柏亭、石川寅治らに師事。1927年に渡欧し、パリなどで美術を学ぶ。帰国後は日本水彩画会を中心に活躍し、後に理事長に就任。国内外を旅しながら晩年まで制作を続けた。写真は、トレードマークのハンチング帽をかぶり、手には複数の絵筆。地元の人たちは“秀因ちゃん”と親しみを込めて呼んでいたそう。1983年5月2日が、庄内での最後の写生旅行となった。（撮影：土井政美氏）



「田麦俣」(1966年)
田麦俣は内藤が何度も足を運んだ場所。



庄内町内藤秀因水彩画記念館
開館／9:00～17:00 入館料／無料
休館／月曜日(祝日の場合は翌日)、
年末年始、展示替え期間、図書館休館日
tel 0234-43-3039
山形県東田川郡庄内町余目字三人谷地58-1
～11/8(日)「かめおかあきこ絵本原画展」を開催中

美術作品や書物は、
先人たちから受け取る
タイムカプセルのような
ものだと思います。



「飛鳥山の桜」(1970年)
梅や桜に代表される春の花木は、内藤が好んで描いた題材の1つ。

★は写真提供＝内藤秀因水彩画記念館